



国際病理アカデミー

日本支部

A NEWS BULLETIN 1999 Number 3

Published quarterly
by the Japanese Division
of the International
Academy of Pathology

OFFICERS

PRESIDENT

S. Ushigome, M.D. (00)

Jikei University

PAST PRESIDENT

M. Suzuki, M.D. (00)

National Defense Medical College

PRESIDENT-ELECT

R. Y. Osamura, M.D. (00)

Tokai University

SECRETARY-TREASURER

O. Matsubara, M.D. (00)

National Defense Medical College

COUNCILLORS

M. Shamoto, M.D. (99)

Fujita Health University

S. Mori, M.D. (99)

University of Tokyo

T. Manabe, M.D. (00)

Kawasaki Medical School

M. Tsuneyoshi, M.D. (00)

Kyushu University

H. Yamabe, M.D. (01)

Kyoto University

Y. Kato, M.D. (01)

Cancer Institute

COMMITTEE CHAIR

Education

T. Morohoshi, M.D. (00)

Showa University

Finance

K. Maruyama, M.D. (99)

Formerly, Chiba Cancer Center

私のIAP歴

元会長 遠城寺宗知



私の国際病理アカデミー(IAP)とのかかわりは1966年、その第6回国際会議に出席したことに始まる。これは岡本耕造会長の下、京都の国際会議場で行われ、私は鹿児島大から参加した。私にとって最初の国際学会出席で、雰囲気には圧倒されていたたまたまなことを覚えている。外国の著名な学者が多数出席していたが、ボストン留学中お世話になった Castleman さんもおられた。

1970年に九大に帰り、そのころIAP日本支部に入会したと思うが、はっきり何時かは覚えていない。下って1975年、1977-79年、1980-82年と3回にわたりIAP日本支部のスライドセミナーで軟部腫瘍を担当している。1978年日本支部理事に選出されたが、地域制を考えてのことと思う。このことが思わぬ幸運を招いた。病理学会を通じて日本学術会議から旅費が出て、1980年パリで開催の第13回IAP国際会議(Neze1of会長)に出席できたのである。パリでは多少落ち着いて会の進行を見極めることができた。この会には太田邦夫先生も出席しておられ、先生を囲んで日本からの出席者が昼食を共にした。日本からの学会出席はまだあまり多くなかった。

第14回国際会議(McGovern会長)は1982年シドニーだった。「軟部の神経上皮腫: 15例の分析」を出題し、初めて国際舞台で演説した。Ackermanさんからおほめのコメントをいただいたが、社交辞令だったと思う。Ackermanさんにはその後Amer. J. Surg. Pathol.(AJSP)のEditorial Boardに推薦いただくことになる。第15回の1984年マイアミビーチ(Vogel会長)には出席しなかった。

第16回の国際会議(Holzner会長)は1986年秋ウィーンで開かれたが、この会は私にとって最も実のあるものとなった。軟部腫瘍のWHO国際組織学的分類のパネルディスカッション(企画:Enzinger/Sobin)で「末梢神経系腫瘍」を担当し、またEnzingerさんと二人で軟部腫瘍のスライドセミナーを受け持った。前者は2日目に終わったが、後者は最終日の最後で、会期中緊張の連続であった。これらの担当については、私が1977年石川栄世さんに紹介をいただき、2ヵ月ほどAFIPのEnzingerさんの下で勉強していたこと、それに1984年の秋にUICC福岡シンポジウム(世話人:九大二外科井口潔教授)でHolznerさんにお会いしていたことなどのいきさつがある。Holznerさんが上記の人選をオーストリア生まれのEnzingerさんに頼んだのである。

この準備も大変であった。症例の選択などEnzingerさんと何度か文通で打ち合わせた。最後は1986年春ニューオーリンズでのIAP米国カナダ支部総会(USCAP)で直接お会いして取り決めた。毎年行われるUSCAPには初めての出席であったが、そのレベルの高さと密度の濃さには驚きと感動を覚えた。丁度助教の恒吉正澄君がニューヨークに留学中で「骨の類上皮血管内皮腫」をDorfmanさんと連名で出題していた。USCAPの会期中にはAJSPのBoard Meetingも行われ、これにも初めて出席した。

1986年に私は再度任期3年の日本支部理事に選ばれ、引き続き1987年次期会長に推された。地方在住ということで辞退申し上げたが、石川さんの強い勧めがあり、牛込新一郎さんが常任幹事をやってくれるというので引き受けた。1988年には第17回国際会議(Cotton会長)がダブリンであり、「成人の筋線維腫症」を出題、台丸裕君が喋った。1990年に九大を定年退職、その年の秋ブエノスアイレスで行



われる第18回国際会議で軟部腫瘍のスライドセミナーに招かれていたが、前年暮れに体調を崩しており、遠路のこともあって、橋本洋君に代わって参加してもらった。司会はドイツのMeisterだった。このとき日本支部は西山保一会長で、第20回会議の日本誘致を試みたが、香港に敗れた。

1991年春に米国留学中の4人の門下を各地を訪ねた後シカゴのUSCAPに出席、5月にはソウルで第2回日韓合同スライドコンファレンスに参加、第3回を福岡に誘致した。1992年いよいよ日本支部会長に就任、秋の第19回マドリッド会議(Llombart-Bosch会長)からIAPのInternational Council Meetingに出席することになった。牛込さんと国際会議の日本再誘致を考えたのもマドリッドだった。1993年秋には日韓合同コンファレンスを恒吉教授の世話で福岡で開催した。

1994年は香港で第20回国際会議(Lee会長)、オーストラリアのA11enさん企画の軟部腫瘍のLong Course第一部の座長に指名され、無事つとめた。また、石川さんのあとを受けてIAPのアジア地区副会長を2年間つとめることとなった。国際会議の日本招致を提言したのもこの会の後であった。そして日本支部会長を鈴木実さんと代わり、前会長となる。

1995年、トロントのUSCAPの折のExecutive Committee MeetingにIAP副会長として出席したが、オーストラリアの辞退で2000年国際会議の日本開催の可能性が濃くなり、早速牛込さんに国際電話したのを覚えている。そして6月、日本、韓国、オーストラレーシア、香港の合同学会(JKAHK Conjoint Meeting)が、IAPオーストラレーシア支部の学術総会に連帯してシドニーで行われた。これは1993年8月IAP日本支部の病理実習セミナーに招かれて来日したA11enさんを通じて我々が提案したことが実現したものである。今回は1999年秋にソウルで開催されることが翌年決まった。11月には第4回日韓合同コンファレンスがあり、何度日かのソウルを訪れて梁文浩さんらのお世話になった。

1996年になると日本への招致は山場を迎える。3月のUSCAPのとき開かれるIAPのExecutive Meetingで説明するため鈴木さん、牛込さんと連れ立ってワシントンに向かった。鈴木さんの流暢な英語の演説により良い感触を得たが、IAP会長のA11enさんも好意的であった。そして最終的には秋のブダペストにおける第21回国際会議(Kadar会長)の際行われたInternational Council Meetingにおける委員の投票で2000年の第23回国際会議の日本開催が正式に決まった。ここでもジョークも交えた鈴木さんの堪能な英語による演説と質疑応答が効果的だった。

ブダペストの会でIAPアジア地区副会長を牛込さんと交代し、1997年限りで代表権のある日本支部前会長の任期も終わり、光栄にも名誉会員にいただいた。あまりお役にも立たなかったが、これで務めを終えたという感じで1998年のニースには皆さんから誘われたが行かなかった。しかし、2000年の名古屋には是非出席して海外からのお客様にお世話になった恩返しを少しでもしたいと思っている。

IAPとのお付き合いは私の人生の中でも最も楽しい、そして意義のある一頁だと思う。外国の著名な学者との交友はもちろんのこと、日本の病理の方々との親しいお付き合いの場となった。江頭さん、西山さん、石川さんらと廻ったオーストラリアやスペインは忘れられないし、森亘、長与健夫、福田芳郎、町並陸生各夫妻ともお付き合いできた。ただ残念なのは、私の英語の会話力が不足していたことである。石川さんや鈴木さんの域に達するのは到底無理であるが、もう少し勉強していれば、IAPの諸行事が一層楽しく、かつ有意義なものとなっていたと思う。若い方々には、是非語学力の研鑽を積み、英語だけでなく、中国語、韓国語を含む他の国の言葉にも通じて、真の国際人としてIAPの舞台上で活躍されることを願っている。

最後に名古屋の2000年IAP国際会議の成功を祈ること切である。
(九州大学名誉教授、福岡県対ガン協会会長)

第2回JKAHK合同集会(いわゆるアジア病理学会)と第6回韓日合同スライドカンファレンスが開催される

正式名The 2nd Conjoint Meeting of the Japanese, Korean, Australasian & Hong Kong Divisions of the IAP and Pathology AssociationsとThe 6th Korean-Japanese Joint Slide Conferenceが1999年10月14日(木曜日)から16日(土曜日)の期間、韓国のSeoulのSwiss Grand Hotelで大盛況のうちに開催された。

経時的に紹介すると、14日19:00から開会式があり、会長のDr. Moon Ho Yangの開会の挨拶の後、牛込日本支部会長、Dr. Anthony S-Y Leongオーストラレーシア支部代表、Dr. Choong Tsek Liew香港支部元会長の祝辞が述べられた。



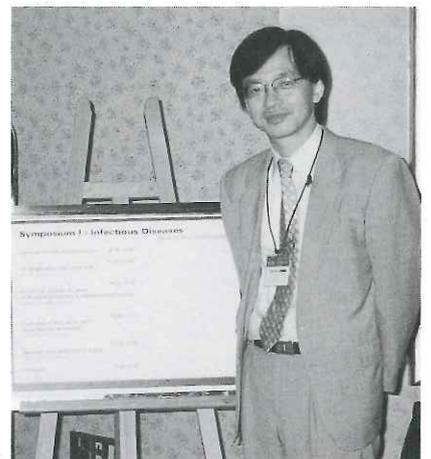
ホテルの滝のある庭Rotus HillでWelcoming Receptionが開

かれ、石川栄世日本支部元会長の乾杯の音頭を取られた。スモークサーモン、海老フライ、お刺し身、お寿司、ギョウザなど(書ききれない種類)食べきれないほのご馳走がならば、お酒はワインの飲み放題でありました。14日は東京と同じく大変暖かく上弦の月のきれいな気持ちのよい宵でありました。



15日は08:00-09:30の間、Dr. Sang Ho ChoとDr. Han Kyeom Kimによる"General Surgical Pathology of the Lung Disease"と題するShort Courseがあり、UIPに合併の癌、Large cell neuroendocrine carcinoma、AIP、DPB、肺高血圧症、NIPが取り上げられ、症例の解説によるスライドセミナーの様であった。Dr. Choは小生がアメリカ留学以来の古い友達で懐かしい再会であった。コーヒーブレイクの後、シンポジウム1の「感染性疾患」が09:50-11:50の間開かれ、司会は会長のDr. Yangとオース

トラリアのDr. Leongがされた。香港からDr. KF Toの"Influenza Virus H5N1 Infection(いわゆる香港インフルエンザ)",日本からは堤寛(ゆたか)先生(東海大)の「恙虫病と日本紅斑熱」、Dr. David Speersの"Overview of Ross River Virus - An Australian Alphavirus",



Dr. Yangの"Hantaan Viral Infection in Korea (昔の韓国出血熱)"と各国から代表的な感染症の実態、臨床、病理が話され、強い関心を集めた。中でも堤先生の「Tsutsuga」は昔、病気という意味であり、「恙なし」とは「元気である」との意味であり、「Tsutsumi」は似ているが私の名前であるとの説明に会場が沸きました。この感染症のシンポはアジア病理会議にふさわしいテーマでありました。

昼食の後、12:50-13:20のPoster Discussion、13:20-15:20の間、シンポジウム2の「H. Pylori Infection: Gastritis and Neoplasia」が開催された。Dr. Yong Il Kimと赤木忠厚先生(岡大)が司会され、オーストラリアのDr. John Pedersenが"The Sydney Classification & Grading of Gastritis"、勝山 努先生(信州大)の「Gastric Surface Gel Layerの認識の重要性」、加藤 洋先生(癌研)の「H. Pylori関連胃炎と胃癌発生」、韓国のDr. Chul Woo Kimの「H. Pylori Related Gastritis & Gastric MALT-lymphoma」、吉野 正先生(岡大)のMALT-lymphomaへのコメント、立松正衛先生(愛知県がんセンター)の「Experimental Model of Gastric Carcinogenesis Employing Mongolian Gerbils Infected with H. Pylori」と話題提供が続いた。6人中4人も日本からスピーカーがでるといふ、この分野での日本の質の高い仕事、またリードぶりが分かるものでした。討議でも中々興味深い、また本質的な議論が盛んに行われ、各国の関心の深さを示していた。最後の最後に日本でもおなじみのDr. Kim(司会者で本来まとめ役なのに)がスナネズミの実験的な腫瘍は本当に癌なのか?などと鋭い質問まででした。

コーヒープレイクの後、15:40-16:30韓国のDr. Je Geun Chiによる"Developmental Anomalies of Central Nervous System"と題する特別講演が行われ、その後、16:30-18:30の間、スライドセミナー1「CNS Tumors」が続いた。これは、Dr. Je Geun Chiと鈴木 実前会長が司会をされ、日本からは中里洋一先生(群馬大)と田中順一先生(慈恵医大)が症例を提示、教育的講義を行われた。他には韓国から3人、香港とオーストラリアから1人ずつ症例提示をされた。とかくとつきの悪い神経腫瘍ではあったが鈴木先生の流暢な英語できびきびと進められ、格調の高いものであったと思いました。18:30-19:15のPoster Discussionの後、Cultural Nightと称するディナーパーティーが行われた。アルコールなしのオードブル、スープ、肉料理、サラダ、デザート、コーヒートのフルコースの後、韓国の民族舞踊、太鼓と一弦琴の演奏を楽しんだ。音楽ではメロディー、リズム、踊りの動きなど、私には何か雅楽、謡やお能なんかを何となく連想させ、懐かしい気持ちがするものでした。

16日は、08:00-09:00のPoster Discussionの後、09:20-10:20の間、USA MayoのDr. Lester E Woldによる特別講演"Proliferative Breast Disease and Early Breast Carcinoma: A Pathologic Continuum"が行われた。その後、10:20-12:20の間、スライドセミナー2「Breast Tumors」が続いた。これは、Dr. Lester E Woldと香港のDr. Ui-Soon Khooが司会をされ、日本からは嵩 眞佐子先生(国立名古屋病院)(NE ductal carcinoma in situ)と長村義之次期会長(東海大)

(Adenomyoepithelioma)が症例を提示、教育的講義を行われた。Dr. Pedersen、Dr. Khoo、Dr. Wold、韓国側からDr. Woo Hee JungとDr. Dong Wha Leeも症例を提示された。症例はMALT lymphoma, Lymphomatoid granulomatosis, Granulocytic sarcoma, Mammary myofibroblastoma, Lobular carcinoma in situ involving sclerosing adenosis, Malignant cystosarcoma phyllodesといった珍しいものであった。トップの嵩先生の物怖じしないどうどうとしたスピーチは観衆を感心させたものでした。長村先生は慣れたもので流暢な英語もどうにいったもの、Dr. Leongの鋭い質問にも"What do you think?"と聞き返し、「質問しているのは私だ」との問答は面白いものでした。Dr. Khooのプレゼンテーションも素晴らしいものであった。

引き続き閉会式が行われ、Organizing CommitteeのChairmanのDr. Kye Yong Songから盛況であり有意義であったこと、参加者に感謝が述べられ、あらためて参加された要人の紹介と拍手(例えば、北京医科大学癌研究センター主任のProfessor Bing Quan Wu、北京医科大学病理学教授でAsia Pacific Association of Societies of Pathologistsの総秘書のDr. Zheng Jie)、次回の開催地は決まっていなかったが次回もみんな集まろうということで閉会した(12:30)。

Postcongress tourは(1) Half-Day Tourと(2) Kyongbok Palace(景福宮)を見るだけのコースがあり、多くの日本人は後者へ出かけた(13:20から)。それは5時から韓日合同スライドカンファレンスがあるためである。景福宮は広大な土地に200棟を越える豪華を極めた楼閣があり、王宮であり、迎賓館であり、政治の中心であったそうだが、1592年壬申の乱(つまり秀吉の朝鮮出兵)によりほとんどが壊されたそうである(悪いことをしたもんである)。それでも慶会楼、勤政殿などが往時の面影を留めていた。午後3時からは観光客のために王の即位式のデモンストレーションが行われた。映画「ラストエンペラー」の縮小版といった感じであった。この日から韓国は大変寒く、震えながら見物した。16:10頃にはホテルに戻った。

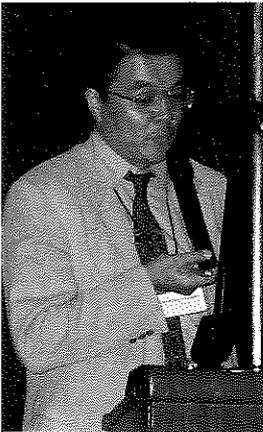
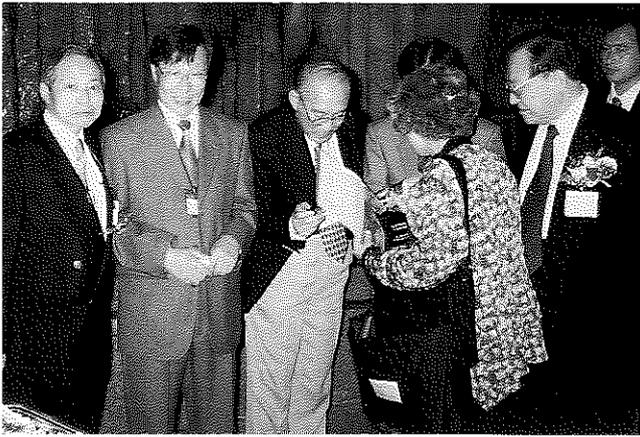
当初Yang kongress会長から、日本側の出席者100人以上を期待すると言われ、宣伝に努めはしたものの大変であるとの認識であった。途中で、Kim's Convention Management Co., LtdのMs. Judy Kang(やり手の女性、会ってみるとすうりとした大層な美人でしたよ)から40人位しか登録していないと情報が入り、困ったなと思っていましたが、結果的には登録者63人(+α非登録者)の出席とのことでまあまあではなかったかと思っています。2こずつのシンポ、スライドセミナーのテーマも大変興味深いもので、聞いていて面白かったし、教育的にも役立つものであったように思いました。司会やスピーカーを引き受けて下さった先生方、演題を出して下さったり、出席下さった先生方、会を盛り上げて下さり、大変感謝しています。日本側の面目も立ち、IAP名古屋2000年kongressにも韓国側から大勢参加して下さるのではないのでしょうか。スピーカーの数など随分日本側にも韓国側は気を遣って下さった様思う。

このアジア病理学会の中心は韓国と日本かの様でした。オーストラリア、ニュージーランド、香港とは勿論のことですが、他のアジア諸国の中国、台湾、フィリピン、ベトナム、ラオス、タイ、カンボジア、インドネシア、シンガポール、マレーシア、ミャンマーなどの国とも交流の輪を将来広げてゆきたいものです。

会場のホテルは超一流で豪華であり、接客態度も大変よかったです。Downtownへ宿泊すると会場へ来たり帰ったり、大変だったかも知れない。Social eventも毎晩用意されていて十分に食事とともに楽しませて頂いた。第2日目のCultural NightのDinnerで何故アルコールが出なかったのかは不思議である。それはそれとして、このkongressの成功はYang先生の大変な気配り、まめまめしい活動、精力的な実行力があってこそと改めて敬意を表したい。

kongressを通して司会をされたのはDr. Hyung Sik Shinで、こぶしのきいた太い声は慣れると何か親しめる人柄を感じさせた。彼は中村恭一先生(東京医科歯科大学)のJICAの消化器病理講習で来日の経験があり、都立駒込病院の小池盛雄先生にお世話になったことを言い大変な親日家でした。





第6回韓日合同スライドカンファレンス

17:00から同じSwiss Grand HotelのBall Roomで開かれた。司会は高麗大学校病理学教授のDr. Yang Seok Chaeがされた。Korean Society of Pathologistsの会長のDr. Yangと牛込会長の挨拶、IAP韓国支部DirectorのDr. Sang Ho Choと私から両国のModerators, DiscussantsとSubmittersの紹介があり、症例検討が始まった。Discussantの持ち分7分、Submitterの持ち分3分、討議3分で、1例合計13分での計画であった。

Case 1 (IAP99-J1) 脾臓のModerator:岩崎 宏先生(福岡大学)、Discussant:Dr. Hee Kyung Changの診断はInflammatory myofibroblastic tumorに対して、Submitter:中山吉福先生(福岡大学)の診断はMalignant lymphoma, diffuse B-cell, primary。

Case 2 (IAP99-K1) 甲状腺のModerator:Dr. Sang Ho Cho、Discussant:加藤良平先生(山梨医大)の鑑別診断はAnaplastic carcinoma, Solitary fibrous tumor, Mesenchymal tumorに対して、Submitter:Dr. Jae Hyuk Leeの診断はLeiomyosarcoma。

Case 3 (IAP99-J2) 子宮頸部のModerator:坂本あつ彦先生(杏林大学)、Discussant:Dr. Hee-Jae Jooの診断もSubmitter:勝山 努先生(信州大学)の診断はAdenoma malignum。Gastric metaplasiaを起こす腺癌という狙い。一致例。

Case 4 (IAP99-K2) 肝臓のModerator:Dr. Cho、Discussant:松本俊治先生(順天堂大学)の診断はCarcinosarcoma、Submitter:Dr. Han Ik Baeの診断はCarcinosarcoma with osteosarcomatous component。間葉成分の分化方向について議論あり。

Case 5 (IAP99-J3) 腎臓のModerator:三杉和章先生(横浜市立大学)、Discussant:Dr. Young Sik Kimの診断も、Submitter:長嶋洋治先生(横浜市立大学)の診断はMetanephric adenoma with glomeruloid differentiation。一致例。

Case 6 (IAP99-K3) 十二指腸のModerator:Dr. In Sun Kim、Discussant:齊藤 澄先生(国立国際医療センター)の診断はUndifferentiated carcinoma of the pancreas、Submitter:Dr. Bong

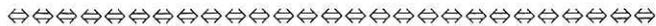
Kyoung Shinの診断はPleomorphic carcinoma (sarcomatoid carcinoma, carcinosarcoma) of the duodenum。組織診断より原発巣にDiscussantとSubmitterで意見の一致をみなかった。

Case 7 (IAP99-J4) 肺のModerator:井内康輝先生(広島大学)、Discussant:Dr. Soon Hee Jungの診断はBAC associated with bronchioloalveolar adenomaに対して、Submitter:武島幸男先生(広島大学)の診断はMultinodular pneumocytes hyperplasia with atypical adenomatous hyperplasia-like nodules。武島先生から症例はTuberous sclerosisを合併していることが披露され、韓国側の小児病院の先生からLAMの画像に典型的であるとの意見もだされた。

Case 8 (IAP99-K4) 軟部組織のModerator:Dr. Moon Ho Yang、Discussant:野島孝之先生(金沢医大)はいくつかの鑑別診断をあげられ、Submitter:Dr. Yangの診断はExtraskeletal myxoid chondrosarcoma。恒吉正澄先生(九大)が10年位前に報告されたdisease entityで、この症例はそうであるとコメントされた。

大変興味ある症例が揃い、もっともっと時間をかけて討議したいものであったが、2時間で8例をこなすという超スピードであったため、参加者は少し不満であったかも知れない。こういうカンファレンスの形式、つまりSubmitterの症例について、DiscussantはHE染色だけで鑑別診断をする、そしてSubmitterが一応の正解と思われる診断を述べるというやり方に慣れていないと、この面白さは分からないかも知れない。Discussantが提示した組織像、文献などと同じものをSubmitterがまた出して繰り返すのでは時間の無駄の様に思われるのだが、Submitterは事前に知らされていないので、一応はすべてのスライドを組むことになるのかも。Submitterもある程度はDiscussantを信用して、免疫染色や特殊な検査の結果と最終診断だけに留める方がよいのではないだろうか。時間は延長して19:20頃終わり、カクテルパーティーが開かれ、ワイン、ビール、ご馳走を食べ、日韓の友好を深めることとなりました。次回の第7回日韓合同スライドカンファレンスは2年後の2001年ということになります。





理事選挙のこと

会員名簿の発送と同時に理事選挙の第1段投票のお願いをしました。その結果を集計し、理事指名委員会へ提出し、4名の理事候補者を決定してもらいます。その候補者のアカデミーへの貢献などの資料とともに会員へお送りし、会員の皆さまには第2段(最終)投票をお願いします。4名の理事候補者をこのプレチンの記事に載せられるといいのですが間に合わず、郵送料の節約などのため別刷りのものを同封します。どうか忘れずに投票をお願いします。

Histopathologyのこと

雑誌HistopathologyはIAP英国支部の機関誌ですが、日本支部会員に格安で売ってくれるとの手紙が牛込会長あてにきました。

We have recently introduced a reduced subscription rate for all overseas members of the International Academy of Pathology. This new rate of £ 70.00/US\$115.00 represents a considerable saving for those members who wish to take advantage of this offer.

I would like to bring this new, reduced rate to the attention of the members of your society and wondered if you would be able to help me in doing this.

Please could you indicate if it would be at all possible to obtain a mailing/membership list of your Society on self adhesive labels or alternatively, if your membership list is not currently available, please would you kindly indicate whether it would be possible to include our promotional leaflet and order form as an insert in your Society Newsletter.

I would be happy to meet any reasonable costs involved and would, of course, comply strictly with any terms of use. I hope that you will be able to look favourably upon my request and very much look forward to hearing from you.

Yours sincerely

Philip Saugman
Marketing Manager - Medical Division
Blackwell Science Ltd.

IAP日本支部第3回理事会のお知らせ

日時:平成11年11月18日(木曜日) 11:40-12:40

場所:千代田区九段南1-6-5

九段会館2階千鳥の間

IAP日本支部1999年度総会のお知らせ

ご出席のお返事を同封のお葉書でお知らせ下さい。昼食のお弁当を用意します。

期日:1999年11月20日(土曜日)、12-13時(1時間)

場所:防衛医科大学校並木会館(学生センター)3階大講堂

1999年度教育シンポジウム プログラム

「病理学領域におけるコンピューターとインターネットの利用」

一日常病理診断業務の支援から学会発表・論文作成に有用なデータの活用まで

Moderator:岩崎宏(福岡大学第一病理)

期日:1999年11月20日、9-12時(3時間)

場所:防衛医科大学校並木会館(学生センター)3階大講堂

1. 序論:岩崎 宏(福岡大学第一病理)

2. 病理におけるコンピューターの応用--可能性と問題点--

向井 清(東京医科大学第一病理)

3. パーソナルコンピューターによる実用的な病理業務システム

3.1. Windows 98桐マクロプログラムを用いた病理業務支援システム 林 徳真吉(長崎大学病院病理部)

3.2. Macintoshとファイルメーカープロを用いた病理業務支援システム

羽賀 博典(京都大学病院臓器移植医療部)

4. LANをベースとした病理業務システムと画像データベース

4.1. 病理診断業務LANシステムにおける画像ファイリング
真崎 武, 土橋 康成(京都府立医科大学病院病理部)

4.2. 病理業務コンピュータシステムと病理医協会の活動
望月 真(東京医科大学八王子医療センター)

5. インターネットを利用した病理医の情報交換ネットワーク

小島 英明(東京都神経研・臨床病理),

能勢 聡一郎(岡山済生会病院),

伊藤 以知郎(袋井市民病院),

福田 康夫(大阪大学歯学部附属病院検査部)

6. 全体討論

この教育シンポジウムへより多くの方々への参加を望みます。当日はご自由にご参加下さい(会場費3,000円、ハンドアウト代含む)。その時に認定病理医の更新に必要な参加証をご用意いたします。5単位が得られます。

1999年度スライドセミナーについて

IAP日本支部教育委員長

昭和大学医学部第一病理 諸星利男

参加者に認定病理医の資格更新に役立つ10単位が得られます。

1999年度スライドセミナー

期日:1999年11月20日、13:00-17:15

場所:防衛医科大学校内の各教室(予定)

1時限目 13:00~

A. 下部消化管の病変 岩下 明德(福岡大筑紫病院)

B. 卵巣腫瘍 手島 伸一(同愛記念病院)

C. 唾液腺腫瘍 長尾 孝一(帝京大市原病院)

D. 悪性リンパ腫(WHO, REAL分類を含む)の病理 菊池昌弘(福岡大医学部)、中村 栄男(愛知がんセンター)

2時限目 15:15~

A. 皮膚の色素性病変 真鍋 俊明(川崎医大)

B. 肺生検(TBLB)の病理 松原 修(防衛医大)

C. 内分泌腫瘍 長村 義之(東海大医学部病理学)

D. 肝の結節性病変の病理 神代 正道(久留米大医学部)

会員名簿1999/2000年版発行される

abc順と地域別の二本立てというUSCAPの会員名簿をまねて発行しました。IAP日本支部25周年記念号(1986年)の中から故太田邦夫元会長の記述から発足当時の事情を引用させて頂いた。故吉田富三先生が40名の会員からなるIAP日本支部の初代会長を12年間務められ、第2代会長を故太田邦夫先生が6年間務められたことが分かります。1999年7月31日現在で正会員が丁度600名となりました。会員の期待に応えるアカデミーでありたいと気を引き締める思いです。本部役員、各国の支部役員も掲載したので何かと役に立つのではないかと考えています。発行するや、次々と間違いのお叱りや変更の届けが来ます。会員名簿の命は短いものですかね。

あとがき:今回も記事が一杯です。韓国特集の感じがあります。本部のプレチンが東京大学病理学教室の特集を組んでくれています。郵送料の節約のため、本部のプレチン、理事選挙の資料、投票用の返信葉書、総会案内の文書、総会へ出席欠席の返信用葉書も同封しています。プレチンへの投稿歓迎です、emailでどうぞ。

常任幹事:松原 修/事務局秘書:佐々木洋子

〒359-8513 所沢市並木3-2防衛医科大学校病理学第2

P: 042-995-1507 / F: 042-996-5193

E-mail:matubara@ndmc.ac.jp